

【池田委員】

- スポーツの世界の中ではコーチという存在があるが、コーチには、目的地に導くという役割がある。例を挙げると、タクシーの運転手と客の関係のイメージで、タクシーを利用する客が選手やアスリートであり、目的地まで間違いなく届けるタクシーの運転手がコーチである。

この関係が教育における教師にもあてはまると考えている。タクシーに乗ってきた客は、自分がどこに行きたいのか運転手に伝えるのが普通であるが、最近の教育では、行き先を言わずに乗ってきた客を運転手が連れていきたい方向にどんどん連れっていってしまうようなことが多くなっていると言われている。つまり、主体的にタクシーに乗ったのに、自分が行きたいところには向かうことができずに、行きたくないところに連れていかれるイメージである。

- スポーツでは、「子どもがなぜそれをするのか、どこに向かいたいのか」という理由やゴールの確認を非常に大切にするようになってきている。

現場で先生方が子ども達にかかわる中で、「なぜ、あなたは、それをやりたのか（するのか）、何を目指しているのか」を子どもに聞くことを重視するだけでも、子どもたちが物事に取り組む勢いが変わってくる。これから、ウェルビーイングを目標に掲げて7教振を推進していくにあたり、「なぜウェルビーイングなのか、子どもたちがどんなゴールを目指すのか」について子ども自身が考え、自分で向かう力を付けられるようにしていきたい。

- 今後の広報活動について、ホームページ等で7教振の紹介をしていくにあたり、視覚や聴覚に障がいがある方等にも伝わりやすいフォントや文字の大きさを工夫する等、障がいをもった方々にも配慮した広報活動を進めていきたい。

【石沢委員】

- 学校という場で、児童や生徒が自分で何かを選択し、自己決定という認識をもちながら学習を行う機会が実際どの程度あるか。大学のゼミの場合は、一人一人の研究テーマが違うので、共通する考え方や向き合い方について他の学生と一緒に考える時間が大半を占める。そこで、教師が学生一人一人と対話をする時間がとても重要となり、多くの時間を対話に充てている。
- これからは、教師が児童生徒一人一人とじっくりと向き合う時間を確保するということがとても重要になってくる。7教振では、かなり具体的な行動を示した施策パッケージを提案している。さらに、例えば、「このようにICTを活用すると、教育DXや教育環境を整えることができ、子どもと向き合う時間を増やせますよ。」というような具体的な道具のようなものを与えられたら

よい。

- 各学校のカリキュラムをより柔軟に考えることができる時代になるので、7教振を周知するだけでなく「こんな道具を使って学ぶ時間を作ってみてはどうですか」といった具体的なサポートを積極的に行っていく必要がある。

【佐藤委員】

- 講話で示された社会人の活躍と幸せの相関におけるデータにおいて、「周囲に期待された以上の成果」や「同様の仕事をしているよりも、良い評価、評判」といったような項目があった。これは、「他者と比較した時に自分はできている」という主観的な感覚が幸せであるという捉えであり、世間一般や他者と比較することが自身の幸せの実感につながっているということが示された結果であると解釈した。

小学校、中学校、高校教育において、幸せをできるだけ多くの子どもたちに最大限感じてもらうにあたって、未だに教育では、「他者との比較」という観点が存在し続けている。学級で様々な活動をする中で、できる子がいて、できない子がいる、また、時間がかからない子がいれば、時間がかかる子もいて、どうしても「他者との比較」を意識せざるを得ない。

一方で、マイクラフトやプログラミング学習、スポーツ等にはまっている子どもは、「過去の自分との比較」を通して、「自分ができるようになった、分かるようになった、前より時間がかからなくなった」といったところに楽しみを見出して魅力にはまっていくのではないか。不登校の子どもは、高校段階において、多様な学びができる様々な学校に通う中で、すごく元気になっていくことを以前も話したが、それと似たようなことがあると思う。

- 「学びの多様化、物差しの多様化」によって、他者との比較から過去の自分との比較へと意識の物差しが変わることで、元気になるような考え方ができればと思う。自分の人生を振り返ってみてもすべてができるようになる必要はないと感じる。

大人になる過程の子どもたちに対して「いろいろな物差しの中で自分が得意なものを選択していけばよい」という感覚を子どもにかかわる大人が伝えるということが大切だと強く感じている。

【末永委員】

- 講話を聴き、主体性がキーワードとして重要だということは非常に共感した部分。主体的に取り組むからこそ、困難に当たっても自立的に動き、その結果パフォーマンスも上がり、周りからも評価される。それがプラスのフィードバックになり、活動がよりよくなる。このサイクルにはまった子どもは当然成績も伸び、様々なところで自信もつく。そのため、ウェルビーイングを核として主体性を持ち、チャレンジングな難しいところに取り組む生徒が増えてほしいと思っている。

計画の推進の段階に移るにあたり、論点の提起として、サイクルに生徒たちを乗せていくために初動作りをどうすべきかについて、まだ見えていない部分である。初動づくりに関しては定量的な結果分析だけではなく、定性的な部分も多く存在する。サイクルへの乗り方などは、一人一人様々あると思うので個別の部分について知見を深めたい。

- 一方で生徒の主体性を奪い、サイクルに乗ることを妨げるファクターもあるのではないかと。奪っているものがあるなら、それが一体何か。家庭環境か、学校でのふとした友達の発言か、先生の言動か。そういったことを計画推進において分析したい。
- 主体性の重要性は皆さんが賛同する部分だと思う一方、主体性のサイクルに乗れなかった子も絶対出てくる。その際、妨げるファクターが個人の努力ではないところにあるならば、これまでの話は強者の理論ではないかとも感じた。サイクルから外れた子がでてきた際に公教育として自助でサイクルに乗れなかった子たちをどうウェルビーイングに向かわせるのかといったことについても考えることが必要。

【高井委員】

- 主体性を育てることは皆さんが重要な点だと捉えていると思う。主体性は社会人になってからも重要だが、ある程度の知識量を超えたところから興味が出てくると考えると、知識と主体性を両輪で回していかないと主体的に自分から動くことが難しいのではないかと感じる。そのため、包括的対応と個別対応どちらも大切になるが、現行の仕組みで進めるとどこかにしわ寄せが来る状況になる。そのしわ寄せが主に先生や行政、地域というところにきて、より一層負担を受ける形になりかねない。そういった負担がかかる部分にどう I C T ・デジタル化を使うかが重要。
- デジタル教材を使えばよいわけではなく、これからの包括的または個別対応というところのやりやすさを作っていくのがデジタル。初期段階としてデジタルに慣れることは大切だが、それを使ってどのように教育の場に生かしていくかということはこれから積極的に進めていくべきことである。

【寺脇委員】

- 現在の 7 教振は、6 教振における成果や課題を基に議論して策定し、ゴールができた状態になっている。このゴールは、報告書に記載されたデータに基づき、足りない部分を捉えて組み立ててきたものである。そのため、今後、このゴールを実践できているか数値で測っていかなければならない。

例えば、アクション 6「教育 DX を実現する」において、「AI 活用に向けた環境整備」や「教育データの分析活用」が挙げられているが、ゴールに対してどのような実践データを取っていくか整理できていない。スモールスタートな事例でもよいので、実践している小さな事例を県民の皆さんに積極的に見

せていくことが必要。

- 一つ気になっている点として、授業における I C T の利用率は山形県の場合は全国平均より少し低い一方、児童生徒の I C T 活用指導ができる教員の割合は全国より山形県が高い状態であり、相反するデータになっている。例えば、A I をどのように教材作成に活用できるのかという小さな活用事例でよいので、もっと現場の先生方にどういった事例で I C T 活用ができるのかについて、7 フェス等のイベントでワークショップを行うなど広報活動を積み重ねていくことで7 教振がしっかり推進されていくのではないかと。今後、7 教振を県民の皆様にご自分ごととして進めていただくため、小さな実践でもよいので、我々から発信していくことも重要。

【内藤委員】

- 山形県はタブレットを持ち帰る頻度が全国より高いという調査結果が出ているにも関わらず、I C T 機器を使用した情報収集等の結果に結びついていない。学校から持ち帰っても有効に使われていないということである。
子ども達が主体的にどう取り組めるかという話になると任せられる怖さもあると思う。I C T 機器のような道具を与えるだけではなく、大人がその道具の使い方もしっかりと伝えていく必要がある。
- 全国的に大人の学びへの姿勢、熱量が高まっていると感じている。自社で開催した社会人インターンシップにも 40 名以上の方が集まり、新たな学びを深めた。また、アルバイトを S N S で募集したところ 80 名以上の応募があり、その際現在の社会を映し出していると感じることがあった。自社の在宅ワークという働き方がフィットしているようで、子どもの事情で仕事を選ばなければならない方や、現在の職場だけでなく自分の学びを深めたいという方が多くいたことが印象に残っている。

【中西委員】

- 6 教振の点検・評価で未達成として挙げられた項目について、未達成なりの要因があると思う。そもそもの指標の取り方が正しいのかという視点もある。達成しなかった理由については、前向きな理由で達成しなかったものや、全国との比較で問題点を整理する必要があるものなど、様々だと思うが、項目によってはきちんと深掘りする必要があると考えるので、ぜひ細かいところまで見ていただき、6 教振の最終年度としての振り返りをしっかりと行っていただきたい。
- 7 教振については、講話や他の委員からどこにたどり着きたいかというゴールの話があった。まさに7 教振では、学生のうちから自分自身がどうしたいか、自分のゴールを見付けるということが重要であるし、そのゴールを子どもたちが見付ける手助けをするということが1 つ柱になると思う。しかし、先生方も今までのやり方ではそのサポートは難しい面もある。そういった中、先生

自身も幸せややりがい、ゴールといったものを見つけないと対応も厳しい。現場でも優先順位を決めてカットする業務を増やすという判断も必要である。教育委員会としてぜひそういったことに対するサポートも並行して行っていたきたい。

- 子ども達の幸福度ややりがいについての指標や達成状況の定期的な確認が必要になるが、それだけではなく、現場の先生方が幸せでないと、子ども達にも幸せを目指すよう言い難いと思うので、先生方の幸せについても確認するようなものがあたらよい。

【藤川委員】

- 職業と結びついた学びはとても意義深いと考えている。生涯教育・学習振興課の教育支援パートナーシップ事業はとても期待している。企業側が提示する内容については、視覚的にも内容的にも学校の先生や生徒たちが使いやすいものであってほしい。
- 伝え方を工夫している企業は、「働く人からメッセージ、やりがい、どうしてこのサイトに登録しようと思ったのかについてのエピソード」なども掲載されているので、こういった工夫があるとよい。また、企業へ掲載をお願いする際には、学校現場が企業にどんな体験などを求めているかを具体的にいくつか示すとミスマッチがないのではないかな。
- 教育支援活動に意欲的な企業等が学校とが連携するという事業の趣旨について、生徒にも「連携とはどういう状態なのか」ということをきちんと示すことがポイントだと思う。

【三浦委員長】

- 今回、報告していただいた山形県の令和6年度の状況は、6教振における10年間の計画の後期計画の最終年度の状況である。最終年度として、6教振の成果、課題をどのように捉えるのかということが評価報告書にさらに強く出てくると7教振のように10年間の計画を立てていくことの意味がさらに明確になってくる。区切りごとに、立ち止まって考えてみるということについて、今日の委員の皆様からもそれぞれの立場から指摘があったので、6教振の柱である基本方針の中で、特に目を向けるべきものについての検討も必要である。

例えば、「変化に対応し、社会で自立できる力を育成する」という基本方針における評価項目では、達成や概ね達成の項目が多くあがっており、成果を上げられる要因は何であったのか。また、「社会を生き抜く基盤となる確かな力を育成する」というところは、未達成の項目が多いが、今後、どのように考えていくべきかなどということについて、一つ一つの点検と同時にそれを俯瞰してみると、6教振が果たしてきた役割というものも非常に明確になり、我々が7教振でやらなければならない方向性も見えてくる。

【小関教育委員】

- 運動と学力との関連性について、ベネッセにおいても評価できるデータをもっていないのであれば、山形が先駆けてやるべきなのではないか。アクション5の「生涯にわたり、学びやスポーツ、文化、芸術活動を楽しむ」中で学力も上がるのではないかとあるとか、実はその方が学ぶ意欲が上がるかもしれないなどの視点をもつこともよいのではないかなと思う。

全国的な調査結果としてデータがないのであれば、山形県がそういう視点をもつことが大切だと感じた。

【工藤教育委員】

- 子ども達から「何のために学ぶのか」という問いを突きつけられた時にはっきりと大人が答えられなければいけない。何のために学ぶのかに対する答えをしっかりと大人が見せてあげられないといけない。それが子ども達を導く一本の光になる。
- 意欲、つまり、モチベーションというのは、子ども一人一人の適性や好きなこと、興味はもちろん大切ではあるが、そこにたどり着く過程、自分の道が決まるまでに様々な経験が必要であり、様々な選択肢に向かわせてあげなければならない。コロナ禍の3年間というものがあって、体験などの学びにおける種といったものに出会う機会を大人が子ども達に与えられていないというところがまだあるのではないかな。

例えば、高校野球などで、ひたむきにのめり込むという経験ができる子どもたちはその競技だけでなく、様々なことに全身全霊をかけて挑むということができる能力が育っている。のめり込む経験が、今は少なくなっているのではないかなということを感じることがある。

何でもよいので本当になりふり構わずやるなど、本気の出し方を見付けられるような機会を、私たち大人が様々な場面でご提供できたらよい。それが将来何になるかというようなことや、適性、これだったら頑張れるという得意なことを見付けていくことになるので、教育の現場でできたらよい。